

子どもの「不読」現象の背景要因は何か？

「第57回 学校読書調査」の分析結果に基づく再考察¹

腰 越 滋*

学校教育学分野

(2015年9月19日受理)

1. 問題設定

子どもの本離れの問題が議論され出して久しい。本を読まない、いわゆる「不読」の問題は、毎日新聞社と共に「学校読書調査」を実施してきた公益社団法人・全国学校図書館協議会² (*Japan School Library Association*: 以下、全国SLAと略記)の機関誌『学校図書館』などに於いて頻繁に議論されてきた。例えば同機関誌の1985年5月号 (No.415) においては、「学校読書調査」30年を読む」という特集が組まれており、不読が多角的に議論されている。その一部を紹介しよう。

昭和30年代にはテレビの普及に始まる文化環境の激変が読書の阻害要因となり、そして昭和40年代に入ると、「読みの多様化」が進んで多読者と不読者の格差が広がった、との指摘がある (今村 1985, pp.20-21)。さらに昭和50年代になると、中学・高校生たちの不読は活字離れによるものというよりは、寧ろ文学離れによるものではないかと推測された (*ibid.*, pp.22-23)。いわばテレビ等のメディア普及が (昭和30年代)、読書の多様化を促進させ (昭和40年代)、そして純文学などから非文学へと生徒の読書行動を拡散させていった (昭和50年代)、という事態が了解される。

こうした議論の背後には、子どもたちの読書の阻害条件を把握したい意識があったと考えられ、その議論の土台として「学校読書調査」の結果が利用されてきた。同調査は、毎年の調査回ごとに質問項目内容が改変されてきてはいるものの、不変な部分がある。それは5月1ヶ月間の「本の読破数【問1】」と「雑誌の

読破数【問3】」を問うた部分である。本稿では、これらの項目を核に、子どもの「不読」の背景要因を探ることに問題設定する。

既述の通り、同調査を遡って時期区分すれば、その時々で不読要因が異なることは、容易に推測される。したがってそれらを一括りにして論ずることはできない。そこで本稿では、焦点を2000年以降の「現代」におく。というのも、今どきの子どもたちを取り巻く環境は、デジタル情報化社会が進展する中で日々変化してきており、特にインターネットが前提となったSNS環境は、子どもたちを大人から益々不可視的 (*invisible*) などと吸引していき、本をじっと読むよりも遙かに刺激的で面白く、刹那の世界へと子どもたちを誘惑しているからである。

本稿では、読書を妨げる活動に関わる質問項目³が収められた2011年実施の第57回調査データを採り上げ、この分析から今どきの子どもの「不読」⁴ 現象の背景要因を探る。

2. 先行研究の検討

先行研究としては、少なくとも以下の3つの問題群を挙げる事が出来よう。

第一は、前述の「不読」の背景や原因に関する議論である。例えば浅井 (1985, pp.37-39) は、不読者増加の原因を、i. 児童・生徒の精神的未成熟、ii. 「ゆとり」の欠如、iii. 読書の基盤となる生活体験や感受性の減衰、iv. マスコミの影響に求める。この指摘に異論は無いが、これらは当時の「学校読書調査」の結果から導かれた推論的考察であり、統計的検証に

* 東京学芸大学 教育学講座 学校教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

基づいた根拠はみられない。

さらに丸山 (1985, pp.48-50) は、中学生の不読急増に言及し、その原因を学校内の指導体制の急変に求める。即ち中・高の場合、教育課程編成上、読書に対する(強制的)配慮が見られなかったために、読書は自主的・任意の対象へと推移した。結果として潜在的な不読志向群が顕在化し、不読者層が激増することとなった。当時はこれに「ゆとりの時間」も加わり、時間削減で教科担任は苛立ち、さらには生活指導対策と多角的行事指導などは昼休みや放課後に回され、生徒による図書館利用を圧迫していった。ただ丸山自身は、論稿の読者として同業の教師を想定しており、「外因については触れていない」(ibid., p.50)と告白している。つまり不読についての社会状況変化などの外的要因については考慮されてはいない。

第二に、読書と学力に関する議論が挙げられる。村山 (2010) らは平成21年度全国学力・学習状況調査」のデータを用いて、読書活動と学力・学習状況の関係について分析した。ここでは「勉強時間と読書時間の合計が同じであれば、読書の時間を取らずにすべてを勉強に費やすよりも、ある程度読書をした方が教科の学力が高い」(ibid., p.30)など、読書が学力向上に裨益するという、経験的知見が強調される。また報告書後半では、共分散構造分析を用いた児童・生徒の学力と読書活動の構造的関係把握が試みられ、読書活動が学習活動を媒介として教科学力に影響を与えることが示される。ただし、読書活動の有効性を示してはいるが、結局不読の背景や原因に言及する議論はみられない。

第三に、不読と社会経済階層・文化資本量の差の問題がある。舞田 (2013) は、先の文科省による全国学力・学習状況調査の2009年度公立中学3年データ部分を利用して、学校の設置主体別、地域類型別に平日の不読者比率を算出した。結果、都市部ほど不読率が高く、舞田はこれを「大都市ほど、子どもが読書に集中するのを妨げる各種の刺激が多いため」(ibid., p.62)と推測する。加えて不読率は、中学校の設置母体別でいうと「国立」<「私立」<「公立」という傾向を示

し、ここに読書行動と社会階層の関連が窺われる。この結果を舞田は、「家庭間の文化資本の違いに由来する『読書格差』ともいえる現象」(ibid.)と断ずる。

社会経済階層差や文化資本の問題は、教育社会学では重要なアジェンダであり続けてきたことには相違ない。だが本稿でのデータでは、それを直接に尋ねた問がない⁵。したがって本稿では、与えられた変数に基づく統計的な分析を基に、“今どきの児童・生徒”の「不読」の背景要因に、可能な限り接近していくことを目指す。

3. データ概要と分析方法

3. 1 「第57回 学校読書調査」のデータ概要

「第57回 学校読書調査」のデータ概要は次の通りである。

調査時期：2011年6月の第1・2週。

対象：全国の小学校28校、中学校36校、高等学校40校。小学生は4～6年生2,569名、中学生(1～3年)3,316名、高校生(1～3年)4,124名で、総計10,009件のデータが採取された。

調査方法：質問紙法で、実施時間は小学校45分、中学・高校は50分。教員がSLA配布の要領を説明しながら教室内で実施。

調査内容：調査内容は、①まず「どのような本や雑誌を何冊読んだか」等の読書の実態調査部分がある。これは5月1ヶ月間の読書について、毎回の調査で同じ内容を尋ねた項目(【問1】～【問4】)から構成されている。②次いで時宜に応じた子どもの読書環境に関する調査項目が付加され、ここは毎回の調査ごとに異なる。57回調査に関しては、伝記に関する読書(【問5】～【問7】)、放課後の過ごし方(【問8】～【問9】)、読書の効用(【問10】)について尋ねている⁶。

この第57回調査で、「読書冊数(Q1)」に影響を及ぼすと考えられる問は、「授業が終わってからの過ごし方(Q8)」と、「その活動の占有時間(Q9)」であり、具体的な質問項目内容は、以下に示される通りである。

Q1 あなたは5月1か月の間に、本を何冊ぐらい読みましたか。借りて読んだ本も入れてください(教科書・学習参考書・マンガ・雑誌や付録を除く)。1冊も読まなかった人は0と書いてください。

Q8 あなたはふだん学校がある日、授業が終わってから、いちばん何をして過ごしますか。もっとも時間を使っているものの番号に○をつけてください。○は1つです。

1. テレビ(ビデオ、DVDを含む)を見る。2. パソコンを使う(インターネット、メールなど)。3. ケータイを使う(インターネット、メールなど)。4. 電子ゲームをする(Wii, DS, PSP, プレステ, パソコン, ケータ

イなどでのゲームを含む)。5. 音楽をきいたり、楽器を演奏したりする。6. 家族といっしょに過ごす。7. 友だちと会って遊ぶ。8. 読書をする。9. 部活動をする。10. 習い事（音楽・バレエ・ダンス・スポーツなど）をする。11. 勉強（宿題や塾、予備校を含む）をする。12. その他（書いてください）。

Q9 【問8】で答えた過ごし方に、あなたは授業が終わってからの時間をどれくらい使っていますか。次のなかから1つだけ選んで番号に○をつけてください。

1. 1時間未満。2. 1時間～2時間未満。3. 2時間～3時間未満。4. 3時間～4時間未満。5. 4時間～5時間未満。6. 5時間以上。

不読の背景要因を探るという課題は即ち、「放課後のどの活動への専心が、子どもたちの読書時間を浸食しているのか?」という疑問を解明することにはほぼ等しい。そこで、5月1ヶ月間の読書冊数を尋ねたQ1を目的（従属）変数とし、放課後の過ごし方に関する問いであるQ8・Q9を説明（独立）変数とする重回帰分析を想定する。放課後の如何なる活動が読書冊数を抑制させるのか、即ち読書活動を阻害する要因は何かを探っていこうというわけである。

3. 2 分析方法

「読書冊数（Q1）」を目的変数とする重回帰分析を実行する場合、当初は「放課後に専心する活動（Q8）」の12項目中、自己撞着をきたす「8. 読書をする」と、「12. その他」の2項目を除き、残った10項目を並べ替える形で説明変数に利用しようとしたが、様々な問題（例えば注1）が発生し、分析に支障をきたすことが判明した。そこで、Q8に「その専有時間（Q9）」を組み合わせた12の新変数（Q8_1t_1～Q8_12t_1）を作り、これらを説明変数とする重回帰分析を考えた。そしてデータセットを整えた後に、以下の3つのモデルを想定した。

Model 1: Q8で「無回答」である回答票をまず削除し、次に「非該当」に0を割り当てたデータセットを用い、Q8の全カテゴリー（Q8_1t_1～Q8_12t_1）を説明変数に加えるモデル。但し質問紙票の限界から、「非該当」に0を割り当てざるを得なかったため、回答を1つのカテゴリーに絞ったことを意味する。したがって共分散に影響を与えるという制約が課されていることには、予め留意を要する。

Model 2: Model 1と同様のデータセットを用いるが、説明変数としてQ8では1つずつのカテゴリーを投入するモデル。この場合の利点は、Q8間の共分散を考慮する必要がないということ。

Model 3: Q8での「無回答」も「非該当」も欠損として処理するモデル。Q8は、1つのカテゴリーだけを投入していく。

3つのモデルを様々な検討した結果、モデル1での解析を採用することとした。結果は、表1（次頁）に示される通りである。

表1より、1ヶ月の読書冊数（Q1.）の多い子は、雑誌も多く読んでいるが（Q3.）、長じるにしたがって読書冊数が減る（F1.）傾向にある。この背景には、部活動（Q8_9t_1）、TV（Q8_1t_1）、携帯（Q8_3t_1）、電子ゲーム（Q8_4t_1）、友人との遊び（Q8_7t_1）などに割く時間が、有意に影響を与えていることが窺える。

ただし、単純集計やクロス集計分析の結果（全国SLA研究調査部、2011）などから、部活動は中学生、携帯は女子高校生、電子ゲームは男子に多く見られる活動であることが、既に判明している。したがって次

節において、多母集団の同時分析を用いて、集団ごとの差異について確認していく。

4. 分析結果

4. 1 重回帰分析の結果より

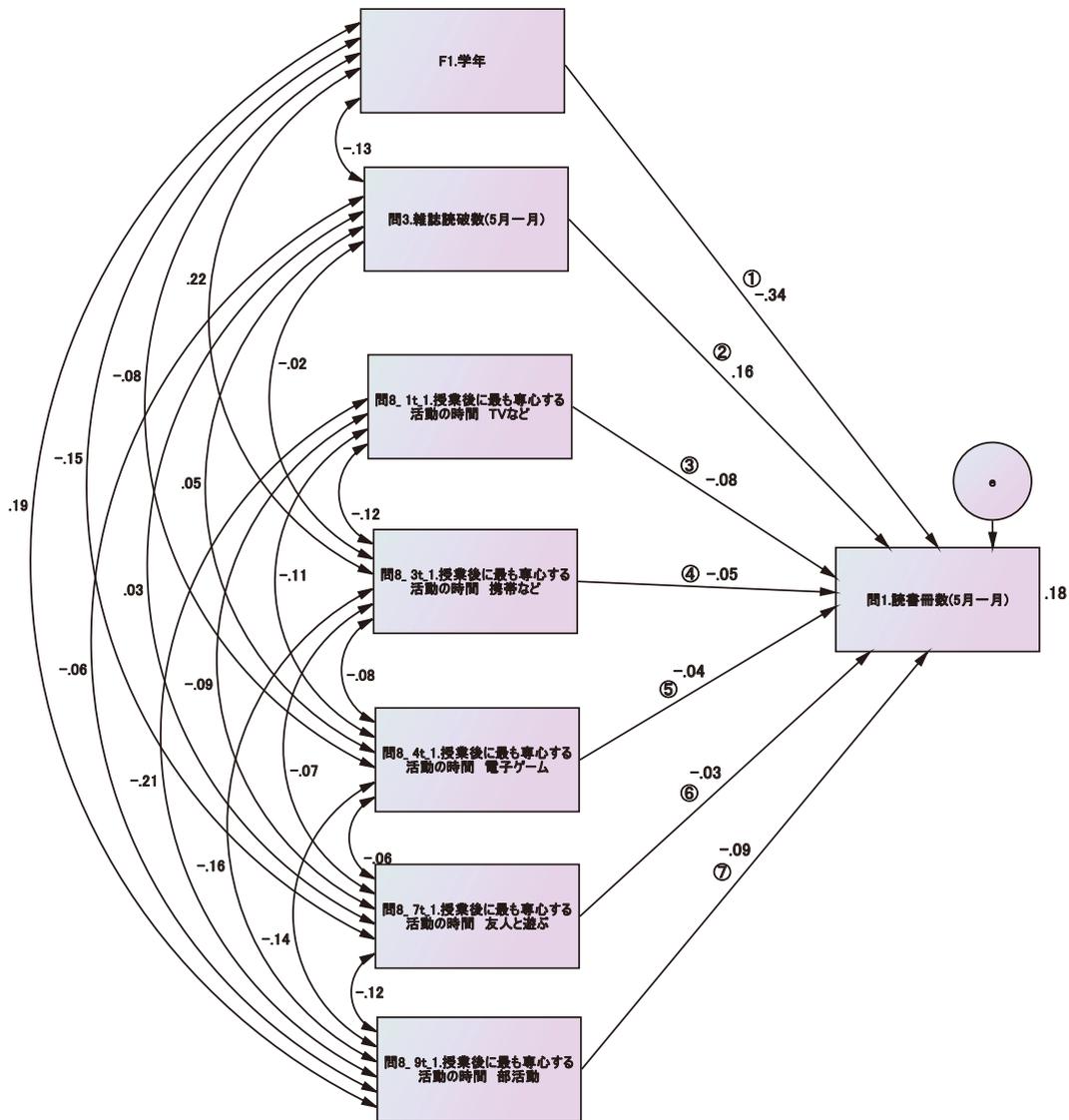
先の重回帰分析モデル（表1）を、Amos20を援用してパス解析図に描き出し、学年と共に不読が助長される現象の背景要因を探るべく、さらに分析を続けていく。まずはリストワイズ削除済みの9,745件データでのモデリングの結果を図1に示す。

表1 重回帰分析 model1

説明変数	偏回帰係数 B	偏回帰係数の標準誤差 S E B	標準偏回帰係数 β
F1. 学年	-1.141	.032	-.345 ***
問3. 雑誌読破数 (5月1ヶ月間)	.173	.010	.160 ***
問8_1t_1. 授業後に最も専心する活動の時間 TVなど	-.493	.060	-.081 ***
問8_3t_1. 授業後に最も専心する活動の時間 携帯など	-.387	.075	-.051 ***
問8_4t_1. 授業後に最も専心する活動の時間 電子ゲーム	-.365	.081	-.043 ***
問8_7t_1. 授業後に最も専心する活動の時間 友人と遊ぶ	-.352	.101	-.033 ***
問8_9t_1. 授業後に最も専心する活動の時間 部活動	-.537	.061	-.089 ***
調整済み R ²		.184 ***	

目的変数： 問1. 読書冊数 (5月1ヶ月間)

*** $p < .001$



読書を阻害する活動とは？
モデル番号 1 グループ番号 1
CMIN=3.245 df=2
GFI=1.000 AGFI=.999
RMSEA=.008 AIC=71.245

図1 読書を妨げる背景要因 (リストワイズ削除済 n = 9,745)

図1中のパス(→)及び共分散(↔)は全て有意であり、非有意なものは省いた。適合度指標はGFI = 1.000, AGFI = .999 となっており、適合度は完全一致に近い。このパス図を起点に、男女別・学校種(学校段階)別の比較を考えていく。

4. 2 多母集団の同時分析

単純集計を含む、これまでの様々な分析の知見より、性別による違いは容易に想定されるが、それをまずは男女別の多母集団の同時分析で確認する。幾つかのモデルを検討したが、最も適合度指標の高かった等値制約なし(配置不変)モデルを採用した。各適合度指標は、GFI = 1.000, AGFI = .997, RMSEA = .008, AIC = 141.860 で、極めて良好である。

ケース数は男子 n = 4,715 ケース、女子 n = 5,030 ケースとなっており、男女ともにパス・ダイアグラム(path diagram; パス図)の構造はほぼ同様で、全体データの場合を示した先の図1と相同である⁷。注目すべきは図1中の①から⑦のパスなので、表2において①から⑦のパス係数値がどのように変わるか確認されたい。

4. 2. 1 男女別グループでの検討

表2から、男女とも①学年が上がるにつれ(F1)不読傾向が強まり、③TV(Q8_1t_1)や④携帯(Q8_3t_1)、⑦部活動(Q8_9t_1)が読書活動を妨げる方向に作用していることが分かる。ただ女子の場合、男子で有意であった⑤電子ゲーム(Q8_4t_1)や⑥友人と遊ぶ(Q8_7t_1)の項目が、読書冊数(Q1)に有意に作用しなくなっている点は興味深い。女子の場合は、長じるにしたがって電子ゲームなどからは離れ、代わりに④携帯でのコミュニケーション(Q8_3t_1)が増え、これがより強く読書活動を阻害すると考えることができる⁸。

4. 2. 2 学校段階別グループでの検討

今度は学校段階別でみてみる。前項と同様に、図1中の各パスに、表3の結果を重ねて見る形で、学校段階ごとの差異を考える⁹。ここでも適合度の最も高かった等値制約なし(配置不変)モデルを採用した。ケース数は、小学生 n = 2,488、中学生 n = 3,234、高校生 n = 4,023 で、各適合度指標は、GFI = .999, AGFI = .992, RMSEA = .014, AIC = 229.286 となっており、極めて良好な適合度を示す。

表2 男女ごとのパス係数値

目的変数	説明変数	男子		女子		パス係数の差の検定
		標準化推定値	有意確率	標準化推定値	有意確率	
Q1 読書冊数	<--- ③ Q8_1t_1 TV等	-0.09	***	-0.08	***	1.642 n.s.
Q1 読書冊数	<--- ⑤ Q8_4t_1 電子game	-0.06	***	0.01	n.s.	3.19 ***
Q1 読書冊数	<--- ② Q3 雑誌読破数	0.17	***	0.15	***	2.458 **
Q1 読書冊数	<--- ⑦ Q8_9t_1 部活動	-0.1	***	-0.07	***	1.738 n.s.
Q1 読書冊数	<--- ⑥ Q8_7t_1 友人と遊ぶ	-0.04	***	-0.02	n.s.	0.854 n.s.
Q1 読書冊数	<--- ④ Q8_3t_1 携帯	-0.04	***	-0.06	***	0.386 n.s.
Q1 読書冊数	<--- ① F1 学年	-0.3	***	-0.39	***	-2.176*
調整済みR ²		0.16		0.22		

目的変数：問1. 読書冊数 (5月1ヶ月間)

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05 n.s.: not significant

表3 学校段階別のパス係数値

目的変数	説明変数	小学生		中学生		高校生		パス係数の差の検定(高・小)
		標準化推定値	有意確率	標準化推定値	有意確率	標準化推定値	有意確率	
Q1 読書冊数	<--- ③ Q8_1t_1 TV等	-0.09	***	-0.08	***	-0.06	***	3.239***
Q1 読書冊数	<--- ⑤ Q8_4t_1 電子game	-0.1	***	-0.02	n.s.	0.04	**	5.437***
Q1 読書冊数	<--- ② Q3 雑誌読破数	0.17	***	0.1	***	0.24	***	-0.053 n.s.
Q1 読書冊数	<--- ⑦ Q8_9t_1 部活動	-0.03	n.s.	-0.09	***	-0.07	***	0.928 n.s.
Q1 読書冊数	<--- ⑥ Q8_7t_1 友人と遊ぶ	-0.08	***	-0.03	*	-0.04	***	2.501**
Q1 読書冊数	<--- ④ Q8_3t_1 携帯	-0.02	n.s.	-0.06	***	-0.07	***	0.55 n.s.
Q1 読書冊数	<--- ① F1 学年	-0.18	***	-0.04	*	-0.04	**	8.229***
調整済みR ²		0.08		0.02		0.07		

目的変数：問1. 読書冊数 (5月1ヶ月間)

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05 n.s.: not significant

表3の①から⑦のパスを、図1に当てはめて考えてみると、小学生では④携帯 (Q8_3t_1) と⑦部活動 (Q8_9t_1) が読書冊数に作用することは考えにくく、実際に非有意となっている。これが中学生になると、⑤電子ゲーム (Q8_4t_1) が非有意になるものの、⑦部活 (Q8_9t_1) が0.1%水準有意で、読書を妨げる方向に作用していることが確認される¹⁰。さらに高校生では、⑦部活動 (Q8_9t_1) と並んで④携帯 (Q8_3t_1) が読書活動を妨げていることが窺える。興味深いのは、⑤電子ゲーム (Q8_4t_1) から読書冊数 (Q1) へのパスの係数値がプラスになっていることである。これは読書と親和的な層が、ゲームと上手につきあっていて、それが回答に反映しているものとみなせるが、小学生・中学生とは異なる傾向を示すものとして注目に値する。

さらに、パラメーターの一対比較で小中高のパス係数の差の検定を試みると、小中の間では、③TV (Q8_1t_1)、⑤電子ゲーム (Q8_4t_1)、②雑誌読破数 (Q3)、①学年 (F1) で、統計的有意差が確認される。TV、電子ゲーム、学年の読書冊数への負の影響は、小学生よりも中学生で弱まる。雑誌に関しては、小中で読書冊数に正の影響を及ぼすが、中学生の方が雑誌を読めなくなるせいか、相対的に影響力が弱まるようである。

中高の間ではどうか。有意なのは、⑤電子ゲーム (Q8_4t_1) と②雑誌読破数 (Q3) である。高校生になると、中学時代よりも雑誌を読めるようで、読書冊数に正の影響を与えている。

最後に小学生と高校生の間でのパス係数の差の検定結果をみてみよう。③TV (Q8_1t_1)、①学年 (F1)、⑥友人と遊ぶ (Q8_7t_1) において、高校生の方が小学生よりも読書冊数への負の影響が弱く、その差が有意となる。⑤電子ゲーム (Q8_4t_1) のみ、高校生で読書冊数に正の影響を与えており、小学生とは有意な差がみられる。

5. 考察および課題

本稿では、放課後の過ごし方 (Q8) およびその活動への占有時間 (Q9) に着目し、今どきの子どもの「不読」傾向の背景を探ってきた。分析結果としては、TV・携帯・電子ゲームなどが読書活動を阻害する背景として浮かび上がった。これは常識的に指摘されてきたことではあるが、本稿で数量データを用い統計的検証を以て実証されえたことは意義深い。TV・携帯・電子ゲームなどは、各家庭での親の配慮により、或る

程度はコントロール可能な領域ではある。だが親子での話し合いを含み、それができる家庭と出来ない家庭との文化階層差などが想起され、親の経済資本・文化資本の差が子どもの読書に如何に影響するのかという疑問は、依然として残されたままである。これを調べるには、家にある蔵書量はもとより、親の属性に関わる新たなフェイスシート調査項目を立てた慎重な検討が求められる。この点は今後の課題の一点目として挙げておきたい。

第二の課題として、今回の問いでは放課後に最も専心している活動 (Q8) を子どもたちに選ばせ、その占有時間 (Q9) を問うたわけだが、実際の放課後の過ごし方としては、複数の活動を子どもたちは行っているはずである。そうだとすれば、平均的な一日の放課後の過ごし方を、活動ごとの占有時間などを訊いてみることで、今回のデータよりも精緻なものが採取できるはずである。小・中・高で表現を変え、工夫をすることでデータ採取ができれば、より精度の高い分析結果を導くことが出来るであろう。

第三に、読書活動を阻害する要因とは逆向きのベクトル、即ち読書活動を促進する環境・条件・要因は何かという方向から考えてみる、という課題が挙げられる。国立青少年教育振興機構 (NIYE) が設置した「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究会」(2013)の研究知見によれば、子どもの頃の読書活動が多い成人は、読書量が多いという。さらに、子どもの頃の読書活動が多い成人ほど、「未来志向」、「社会性」、「自己肯定」、「意欲・関心」、「文化的作法・教養」、「市民性」を含む現在の意識・能力が高くなるという。ここからは、子ども時代の読書経験が成人期での豊かな人生を拓くというビジョンが示唆されている。また同報告書では、体験活動と読書との関連についても知見が披瀝される。即ち、「就学前から中学時代までに読書活動が多い高校生・中学生は、就学前から中学時代までの体験活動も多い」(ibid., p.32)、と。

今回、本稿での分析に用いた調査には、読書活動を促進する環境・条件・要因は何かを探る調査項目は無い。したがって、この観点での調査項目を含めた実査を行い、本好きな子どもを育てる環境についても考察を続ける必要がある。というのは、そうした考察はNIYE研究グループの知見の妥当性を、別の角度から検討することにも繋がるからである。

引用・参考文献

浅井 昭治 1985、「なぜ不読者と多読者に分かれるのか」、『学

- 校図書館』, 1985年5月号/通巻第415号, 全国学校図書館協議会, 37-39頁。
- 平山 祐一郎 2009, 『『読書』このパラドキシカルな世界』, 『学校図書館』, 2009年11月号/通巻第709号, 全国学校図書館協議会, 54-55頁。
- 今村 秀夫 1985, 「読書環境と読書問題の変遷 ～子どもをめぐる30年～」, 『学校図書館』, 1985年5月号/通巻第415号, 全国学校図書館協議会, 19-23頁。
- 国立青少年教育振興機構・「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究会」編 2013, 『子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究 報告書[概要] — 子どもの頃の読書活動は、豊かな人生への第一歩! —』, 独立行政法人 国立青少年教育振興機構。
- 腰越 滋 2013, 「子どもの不読傾向に関する一考察 —「第57回学校読書調査」の分析結果を手がかりとして—」, 『東京学芸大学紀要・総合教育科学系 I』, 第64集, 55-67頁。
- 毎日新聞社・広告局 2012, 『2012年版 読書世論調査 第65回読書世論調査/第57回学校読書調査』, 毎日新聞社。
- 舞田 敏彦 2013, 『教育の使命と実態 データからみた教育社会学試論』, 武蔵野大学出版会。
- 文部科学省・国立教育政策研究所 編 2013 (平成25年8月), 『平成25年度 全国学力・学習状況調査 報告書 <<質問紙調査>>』, 文部科学省。
- 村山 功 (研究代表) 2010, 『平成21年度 文部科学省 委託調査研究 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 C. 読書活動と学力・学習状況の関係に関する調査研究 分析報告書』, 文部科学省。
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/045/shiryo/attach/1302195.htm; last access: 2015.8.26)
- 吉田 真弓・川島 一夫 2004, 「読書への意欲と読書の意味づけ — 読書量と読書に対する評価 —」, 『信州大学教育学部紀要』, 112巻, 169-179頁。
- 全国SLA編, 1985, 「特集: 学校読書調査の30年」, 『学校図書館』, 全国学校図書館協議会, 9-61頁。
- 全国SLA研究調査部, 2011, 「第57回学校読書調査報告」公益社団法人全国学校図書館協議会 発行, 『学校図書館 No.733 (2011年11月号)』, pp.12-38.

謝辞

本稿は、公益社団法人・全国SLA（森田 盛行理事長, 設楽 敬一常務理事）の許諾を得て執筆¹¹された。記して謝意を表したい。

注

- 1 本稿は、既に発表した腰越 (2013) を再考察し、分析方法を修正・改善して作られた新たな論考である。先の論考 (*ibid.*) では、その注9で下記のような説明を付け、重回帰分析の説明変数に問題がある点を表明していた。
もともとアト・ランダムな選択肢として並んだ名義尺度を、受動的で頭脳を駆使しないデジタル的な活動から、より高度で文化的と思われる活動へと並べ換え、【問8】全体の項目を順序尺度として扱うところには、問題がある (*ibid.*, 65頁)。
本稿では、この点を修正すべく、【問8】と【問9】を組み合わせることで、新たな説明変数を作り、再分析を施してある。いわば、前稿があった上の進化型の論考である。分析データは前稿と同様ではあるが、分析上の問題を改善してある点で、本稿を「第57回 学校読書調査」データを用いた重回帰分析の、一応の完結編と位置づけられたい。
- 2 全国SLAの公益社団法人化は、2012年4月1日からである。筆者は、全国SLA研究調査部の依頼を受け、この「学校読書調査」に調査票設計の段階から無償で関与すると共に、データ採取後の分析にも、第57回調査より第59回調査まで関わった。
- 3 調査票は、最終的にはSLA研究調査部と毎日新聞社との合議で決定される。したがって、「多変量解析などの統計解析にも耐えうる調査設計が必要」と考える筆者の意向とは、必ずしも合致しないものとなった。調査後にデータ解析を行う段になって、本稿のような変数加工が必要になったのも、多くはこの点に由来することを、予めお断りしておく。
- 4 SLA調査では、Q1の読書冊数としては紙媒体を前提としてきた。しかし現代の中・高生は、「携帯電話などを利用してネット環境下で読書する」という学校司書らの指摘もあり、それらをもしカウントすれば、長じるに当たって「不読」となる率は、現状の集計とは異なる結果が予測されるだろう。また、小学生の読むような薄く挿入絵が多く頁数の少ない本と、高校生が手にするハードカバーの本を、同列に1冊と集計してよいのかという問題もある。これらの諸点により、Q1のデータ採取については、実態把握の上でも今後慎重な検討と工夫が要る。さしあたり本稿では、電子媒体書籍までは把握しえていない現状での分析であることを、ご了解頂きたい。
- 5 個人情報保護の観点から、インフォーマントの子どもたちの家庭の経済状況・親職などを質問紙調査で尋ねられないという制約がある。昨今の社会調査では、経済的・社会的・文化的な階層に関する変数を含む調査項目を設

- 定すると、調査協力拒否のリスクを孕む傾向にあることは否定できない。
- 6 本稿では、図表や分析結果などの表記も含め、【問1】はQ1とも表記されている。(他の問も同様)。
- 7 男女で、係数値と有意・非有意の係数にやや違いが見られるが、パスについては表2. で分かる。共分散の違いについては、「Q3 雑誌読破数」 \leftrightarrow 「Q8_7t_1 友人と遊ぶ」の部分のみ、男子で係数値 .04で有意 (** $p < .01$) であるのに対して、女子は係数値 .03で非有意 (*n.s.*) となっている。
- 8 ただし、パラメーターの一対比較で男女のパス係数の差の検定を試みると、男女で統計的に有意な差があるのは、⑤電子ゲーム (Q8_4t_1), ②雑誌読破数 (Q3), ①学年 (F1) に留まる。したがって携帯が読書を阻害する要因として、女子は男子より強く作用しているが、統計的な有意差をもつほどの差はない、というのがより精確な言い方となろう。
- 9 当然のことながら、小中高で係数値と有意・非有意の係数に違いが見られる。パス係数値については表3で確認されたい。共分散の違いについては、煩瑣に過ぎるため割愛した。
- 10 ただし、中学校での部活が読書を妨げているから悪いと断罪しているわけではない。学校によっては全員参加を義務づける中学校もあろうし、体育会系部活では文化教養的な側面の強い読書を歓迎しない気分が残っていることも想起せられるからである。本稿では数量データを以て、事実としてそういう傾向が有意に確認されたという指摘に留めておく。
- 11 「第57回 学校読書調査報告」は、『学校図書館 No.733 (2011年11月号)』に掲載の通りであり、一部 (pp.33-37.) を筆者も分担執筆している。また毎日新聞社からも独自に報告書 (毎日新聞社・広告局 2012) が毎年度の調査ごとに出版されている。ただデータを共有しつつも、全国SLAが毎日新聞社の報告書に関与することはない。本稿も毎日新聞社の報告書とは独立に執筆されたものである。

子どもの「不読」現象の背景要因は何か？

「第57回 学校読書調査」の分析結果に基づく再考察

What is the background factor of the phenomenon in which a child does not read a book?:

Re-consideration based on the result of having analyzed the “57th school reading investigation”

腰 越 滋*

Shigeru KOSHIGOE

学校教育学分野

Abstract

This paper was made after reconsidering the analysis method which became a problem in the front draft (Koshigoe 2013). The data used for analysis is the “57th school reading investigation” which the Mainichi Newspapers and “national SLA (abbreviated name)” conducted together.

The problem recognition of this paper is exploring the background factor of the situation of a student's aversion to reading. The technique of multiple regression analysis was used for the method of solving a problem. This paper is the completion version of the analysis which used the “57th school reading investigation.”

I can summarize an analysis result in ten knowledge shown below.

- (1) The student with many reading for one month is also reading many magazines. But a student's number of reading shows the decreasing tendency as it becomes an upper grade.
- (2) This situation means that it is the hindrance of reading to play use of the club activities of a school, television reception, and a mobile phone and an electronic game and to play with a friend.
- (3) The tendency not to read a book becomes strong as boys and girls become an upper grade.
- (4) In the case of girl students, playing an electronic game or playing with a friend do not act on barring reading greatly. Girl students separate from playing an electronic game as they become an upper grade. Instead, the hour of use of a mobile phone increases and I lead to prevention of reading activities.
- (5) In the children of an elementary school, a mobile phone and part activity do not become the hindrance of reading activities.
- (6) But if it becomes a junior high school student, the club activities of a junior high school will act on barring reading with a statistical significant difference.
- (7) In addition, if students go on to a high school, the club activities of a school and use of a mobile phone will lead to barring reading activities.
- (8) Between school children and junior high school students, a statistical significant difference is verified in television reception, an electronic game, the number of magazine perusal, and a grade. But in a junior high school student, negative influence on reading of television reception, an electronic game, and a grade becomes weaker a little.

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

(9) There is a statistical significant difference in an electronic game and the number of magazine perusal between junior high school students and high school students. In high school students, rather than one's junior high school student days, I can read a magazine now and the number of magazine perusal has influence of positive on the number of reading volumes.

(10) The negative influence on the number of reading volumes has high school students weaker than school children by playing with television reception, a grade, and a friend between school children and high school students. And the difference is statistically meaningful. Furthermore, an electronic game has influence of positive on the number of reading volumes among high school students. And this difference is also statistically meaningful.

At the end, three subjects left unloaded are shown below.

The first subject is that the difference of the quantity of parents' economic capital and cultural capital explains the question how to influence a child's reading.

The second subject is devising the question item of a questionnaire. That performs minuter data extraction. And it is drawing a higher-precision analysis result.

The third subject is considering the environment which promotes reading activities, and conditions. And it is that we consider the environment where the child who likes a book grows up.

Keywords: Reading investigation, The phenomenon in which students do not read a book, Multiple regression analysis, Simultaneous analysis of many populations, Cultural capital

Department of School Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿は、拙稿（腰越 2013）での問題点を再考し、分析方法を改善して作られた新たな論考である。

分析データは前稿と同様、公益社団法人・全国学校図書館協議会（*School Library Association*：略称、全国SLA）と毎日新聞社が、共同で実施してきた「学校読書調査」であり、平成23年度実施の「第57回 学校読書調査」データが該当する。本稿の問題意識は、子どもの「不読」の背景要因を探ることで、方法としては重回帰分析を用いて問題解明に迫った。その際、「授業が終わってからの過ごし方（Q8）」のみを説明変数にするのではなく、「放課後の活動の占有時間（Q9）」をQ8に組み合わせた新変数を作成し、これを説明変数として、より精確な分析を実行した。その意味で本稿が、「第57回 学校読書調査」データを用いた分析の、一応の完成版となる。

分析結果としては、10の知見が挙げられる。まず全体データの分析からは、次の2点が分かった（①・②）。

- ① 1ヶ月の読書冊数（Q1.）の多い子は、雑誌も多く読んでいるが（Q3.）、長じるにしたがって読書冊数が減る（F1.）傾向にある。
- ② この背景には、部活動（Q8_9t_1）、TV（Q8_1t_1）、携帯（Q8_3t_1）、電子ゲーム（Q8_4t_1）、友人との遊び（Q8_7t_1）などに割く時間が、有意に影響を与えていることが考えられる。

続いて多母集団の同時分析からの知見で、男女別の分析からは、③・④の2点が挙げられる。

- ③ 男女とも学年が上がるにつれ（F1.）不読傾向が強まり、TV（Q8_1t_1）や携帯（Q8_3t_1）、部活動（Q8_9t_1）が読書活動を妨げる方向に作用している。
- ④ 女子の場合、男子で有意の電子ゲーム（Q8_4t_1）や、友人と遊ぶ（Q8_7t_1）の項目が、読書冊数（Q1）に有意に作用しなくなっている。女子の場合は、長じるにしたがって電子ゲームなどからは離れ、代わりに携帯でのコミュニケーション（Q8_3t_1）が増え、これがより強く読書活動を阻害する。

さらに学校段階別の多母集団の同時分析からは、⑤から⑦の3点の知見を指摘しうる。

- ⑤ 小学生では携帯（Q8_3t_1）と部活動（Q8_9t_1）が読書冊数に作用せず、非有意となっている。
- ⑥ だが中学生になると、電子ゲーム（Q8_4t_1）が非有意となるものの、部活（Q8_9t_1）が読書を妨げることに有意に作用することが確認される。

⑦ さらに高校生では、部活動 (Q8_9t_1) と並び、携帯 (Q8_3t_1) が読書活動を妨げることが窺える。

その他、パラメーターの一対比較で小・中・高のパス係数の差の検定を試みると、以下の3点が分かった(⑧~⑩)。

- ⑧ 小・中の間では、TV (Q8_1t_1)、電子ゲーム (Q8_4t_1)、雑誌読破数 (Q3)、学年 (F1) で、統計的有意差が確認されるものの、TV、電子ゲーム、学年 の読書冊数への負の影響は、中学生になるとやや弱まる。
- ⑨ 中・高の間では、電子ゲーム (Q8_4t_1) と雑誌読破数 (Q3) とが有意である。高校生になると、中学時代よりも雑誌を読めるようで、読書冊数に正の影響を与えると見なせる。
- ⑩ 小・高の間では、TV (Q8_1t_1)、学年 (F1)、友人と遊ぶ (Q8_7t_1) において、高校生の方が小学生よりも読書冊数への負の影響が弱く、その差が有意となる。さらに電子ゲーム (Q8_4t_1) は、高校生で読書冊数に正の影響を与えており、小・高の間で有意差が認められる。

以上の知見を踏まえ、依然として残された課題を3点ほど挙げる。第一の課題は、親の経済資本・文化資本の差が子どもの読書に如何に影響するのかという疑問を解消することである。これには、親の属性に関わる新たな調査項目を立てた慎重な検討が求められる。課題の第二は、放課後に最も専心している活動 (Q8) を子どもたちに選ばせ、その占有時間 (Q9) を問うのではなく、平均的な一日の放課後の過ごし方を活動ごとの占有時間などを訊き、より精緻なデータ採取をすることで、より精度の高い分析結果を導くことである。第三に、読書活動の阻害要因とは逆のベクトル、即ち読書活動を促進する環境・条件・要因は何かという方向から考え、本好きな子どもを育てる環境についても考察する、という課題である。そうした考察は「子ども時代に読書した人は、人生に前向きになる」とした国立青少年教育振興機構 (NIYE) 研究グループの先行研究の妥当性を、別角度から検討することにも繋がるだろう。

キーワード: 読書調査, 不読, 重回帰分析, 多母集団の同時分析, 文化資本